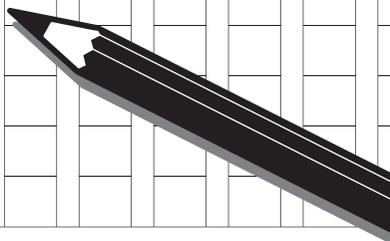


令和3年度

第7回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館



姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第七回目を迎えた今回は、全国から一八四八点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはず。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

姫路文学館

## 目 次

### ■ 中学生部門

最優秀賞 「いいね！ステイホーム」 兵庫県 姫路市立城山中学校 一年 中井 大輔 …… 4

優秀賞 「この夏つけた紙ワザのコミュニケーション」 兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年 大山 凜菜 …… 8

佳 作 「十五歳の夏に」 兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年 東野 結香 …… 11

### ■ 高校生部門

最優秀賞 「伝える相手は」 東京都 渋谷教育学園渋谷高等学校 一年 近藤 千紗 …… 15

優秀賞 「車窓の景色」 兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 一年 永田 来幸 …… 19

佳 作 「心の向日葵」 兵庫県立姫路西高等学校 二年 齋藤杏里紗 …… 23

### ■ 一般部門

最優秀賞 「さよなら、我が家」 福岡県 朝倉市（自営業） 感王寺美智子 …… 26

優秀賞 「ご褒美」 大阪府 羽曳野市（会社員） 松田 良弘 …… 30

佳 作 「二度目の初心」 長野県 南佐久郡（自由業） 常世ゆかり …… 34

### ■ 概 要

…………… 38

第七回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立城山中学校 一年

## いいね！ステイホーム

中井 大輔

「ステイホーム」最近はこの言葉も当たり前に使われているが、一年前の三月頃は、急に学校が休みになり、訳が分からず時間が止まってしまったかのように感じていた。しかし、止まっていたはもったいないので、僕は2つ上の兄と計画して、四つのことをやってみることにした。

一つ目は、予定を立て、毎日規則正しく生活すること。朝、野球の練習後、午前中は自主学習。昼ご飯は祖母と一緒に自分達で作る。午後は休憩した後、また運動と自主学習。夜はみんなでゲームをしたり、テレビを見たりする。毎日同じ事を繰り返していたが、毎日飽きることはなかった。今考えれば、兄や弟がいてくれたからこそ、飽きることなく毎日楽しくできていたんじゃないかなと思う。

二つ目は、時間があるからこそ今しかできないことをする。家には山があるので、竹や木を削って何かできないか考えた。兄と2人で調べ、考えた末、竹で椅子と机を作ることになった。第一段階は、山で竹を切る作業。思ったよりも切りにくくて苦労した。どこで

力を入れるとよく切れるか、どの向きに切り倒せば安全か、など少しずつ分かってきた。

僕と兄は切る係、一番下の弟は道具を運ぶ係、それぞれに作業を進めた。第二段階は、切った竹を設計図の長さに合わせて短く切る作業。「○cmを○本」というように測りながら切っていく。この作業では、測るのが兄、切るのが僕、運ぶのが弟。分担するとはやいはい。

第三段階は、いよいよ組み立て作業。これが意外と難しかった。縄を竹の間にはさみながら組んでいくのだが、バラバラになってしまう。しかし、僕にはこんな才能があったのかと自分でもびっくりするほど、コツをつかんでみんなの分を仕上げることができた。家族みんなに褒められてすごく嬉しかった。みんなで完成を祝い、外でご飯を食べた。何日もかけて作り上げるなんて、普段なかなかできない経験だった。時間に追われることなく、こんなにゆっくりと自由にできるなんて、今までなかったので、とても楽しかった。

三つ目は、変化を楽しめるように何かを育てること。僕達は野菜作りにした。畑を耕し、土作りをした後、苗を植える。トマト、ピーマン、ねぎ、ししとう、とうがらし。野菜作り初心者でも簡単にできると苗屋さんが教えてくれた野菜にした。言われた通りやってみて、毎日水やりをした。少しずつ大きくなる様子に野菜嫌いの僕も「食べてみたいな。」と思ったぐらいだ。収穫した喜びは格別だった。何かを世話したり、育てたりすることは、それをする人に喜びを与えてくれるような気がした。もちろん、今年も野菜作りを楽しん

でいる。

四つ目は、ご飯をみんなで食べることに。僕達が作った料理もたくさんある。焼き飯、焼きそば、カレー、オムレツなど。料理上手な祖母に教えてもらいながら、兄と協力して作った。食べる場所も大切に、どんな料理でも外で食べると本当に気持ちが良いことが分かった。テントを張り、僕達の手作り机と椅子を並べ、みんなで食べる。休校期間が終わった後も、よく外で食べている。そして、最近分かったことなのだが、外で食べるときの方が、会話が増え、家族みんなが笑い、笑顔になることが多い。

休校中は色々な体験が出来た。緊急事態宣言が発令されても、もう休校になることはないかもしれない。そう考えると、あの三か月は一生に一回しかない貴重な時間になったような気がする。あの時の時間の流れはとてゆつくりだった。普段、僕達の周りの時間ははやすぎるのだ。それに、僕達はやるが多すぎる。なぜそう感じるかというと、僕はいつも周りから責め立てられるほど、大雑把でのんびりした性格だからだ。脱いだ服はほつたらかし、使った物はその辺に置いたまま、鼻をかんだティッシュはゴミ箱に入れないなど数えあげれば切りがないほどアバウトな性格だ。だから、周りがきつちりかっちりすれはするほど、自分の荒さが際立つ。そんな僕だから、このような時間の流れはとても心地

よく感じたのだ。「ステイホーム」とは本当によく考えられた言葉だと思う。はじめは「家の中でじっとしていなさい」という意味だと受け取っていたけど、色々やってみて「家でできることを工夫して楽しみなさい」ということだとわかった。コロナで全世界が大変な状況ではあるが、これがいい機会になるんじゃないかなとも思う。家族の絆が深まるし、一人暮らしの人でも普段できないことにチャレンジできる。僕の家では最近も家の外でご飯を食べたり、みんなで近くの山に登ったりして、共通の時間を過ごしている。これから兄も僕も弟も成長するにつれて、それぞれが忙しくなる。家族が一緒にいる時間も少なくなるだろうが、ご飯を食べたり、何かを一緒にしたりする時間は大切にしていきたい。

中学生部門

優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 二年

この夏見つけた紙ワザのコミュニケーション  
大山 凜菜

「今何してる？」

何も相手に伝えたいことがないのに気付いたらその日もタブレットに手がいつていた。コロナの影響もあり友達に会えないこの夏。時間があると友達にLINEでメッセージを送ったり送り返したり。そんな風にタブレットとにらめっこする日々を送っていた。メッセージを送るとすぐに返事が来る。とても便利だ。今の中学生にはなくてはならないものだ。

そんなある日、お母さんと一緒にショッピングセンターの雑貨屋さんに行った。私は、今年からテニス部に入ったのだが、「テニス部の伝統」で先輩に暑中見舞いを書かなければならなくなつたのだ。今まで私は暑中見舞いを書いた事がなかったので、何だか新鮮な感じがした。いざ選ぶとなるといろいろとデザインが気になってなかなか選ぶのが難しい。まるで私が幼かった頃にたくさんのシールから気に入ったシールを一生懸命探し出す時の

ように。選んだのは海辺でビーチボールで遊ぶ子供の絵が書かれたはがき。夏っぽくて気に入った。さあ、家に帰ってよいよ暑中見舞いを書く。しかし暑中見舞いを書いたことがなかった私にとつて、暑中見舞いを書くのは簡単ではなかった。書いているうちに、書き始めはどうしたら良い？相手を思いやる文章を書くにはどうしたらいいのか？など次々と疑問がわき上がる。そのうち私の中で一番気になったのが、どうやって自分の気持ちを相手にハガキで伝えるか？だった。いつも友達と「元気？」とメッセージを送り合っていることと同じようなことなのに。「お元気ですか、」と書いて続きが書けなくなった。どうしよう。ハガキで自分の気持ちを書くという行為は、落ち着きがなくて、違和感があるように感じた。そんな私を見かねて、お父さんが「とりあえず何でもいいから書いてごらん。」とアドバイスしてくれた。思うがままに書いてみた。少し、手紙みたいになってしまった。何とか自分の伝えたいことは書けたと思った。しかし、その安心感とは別に、今まで感じたことのない、達成感を覚えた。またその達成感は、私の狭かった視界を広げてくれて、新たな自信にもつながった。この感覚ってどういうことなんだろう。そして数週間後、先輩からお礼のはがきが来た。「お元気ですか？」「お疲れ様！」から始まって、私が一生懸命練習していたことをほめてくれたり、分からないことがあったら気軽に聞いてねと言っ

てくれたりしている。先輩ごとに大きな字、小さくて丁寧な字、個性があふれている。普段のメールでのメッセージとはまた違う喜びを感じた。

私は今まで、相手を気づかったり、自分の気持ちを相手に伝える手段はメールやLINEが一番だと思い込んでいた。しかし、自分の選んだお気に入りのはがきで、相手を思いやり、自分の近況を伝える。そして、毎日のように郵便ポストを覗き、相手の返事を待つ。私がせっかちなだけかもしれないが、待ちくたびれた頃に返事が返ってくる。紙を使ったコミュニケーションってすごい。やりとりした喜びとともに相手の知らなかった魅力に気づくことができるのだ。もう一つ、ハガキのやりとりで発見したことがあった。これまでは自分がやったことがないことについて何となくさけてきた。それは、自分の弱い部分を知りたくなかったからかもしれない。しかし、ちよつとしたことだが、暑中見舞いでやりとりしたことで、自分のことを知ることができたように思う。そんな大事なことをこの夏、暑中見舞いを書いて、返事が来て、それを読み、いろいろ考えてみて発見できた。そんな話をお父さんにしたら「それって紙ワザのコミュニケーションだね」と言って笑った。

中学生部門

佳作

## 十五歳の夏に

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年

東野 結香

「あなたの趣味はなんですか？」

自己紹介において一番定番ともいえるこの質問が、私は苦手だ。なぜか？理由はいたって単純かつ明確だ。今の私には、それに該当するものがないから。答えに詰まったある日、友達とノリで答えた結果、今年度のオーラルの先生との間では、私の趣味は勉強ということになっている。非常に深刻である。ちなみに、好きなことやものを問われるケースについても、思いつかず口ごもってしまう。ドラマ、アニメ、イラスト、楽器、K-pop、ファッション、美容、ダンス、歌……。趣味の話題になると、それぞれが興味を持っている何らかについてとっても幸せそうに語ってくれるので、聞いている私も楽しくなる。だから友達の話聞くことが好きだ。…のんきにそんなこと言ってる場合じゃない、と時々、何か私も熱中できることがないか探すこともあるのだが、すぐに挫折する。そうこうしているうちに、みんなが青春を謳歌しているであろう十五歳の誕生日を迎えた。華のageも後半に突入である。ならば、この機会にせひとも自分の趣味を確立させようではないか！そし

て残りの十代をきらきらと過ごそうではないか！うん、それがいい。

さて、そうは言ったものの、何から始めたらいいのだろうか？調べてみる。「趣味 見つけ方」。趣味を選ぶ基準はたった一つ？それなら簡単じゃないか。「ときめくこと」なら私にもあるぞ！たとえば、そうだな、えーと…？まずい。思いつかない。ん？いや違う、「思いつけない」のだ。と、ある可能性が頭をよぎった。私の趣味は、私自身によって風化されているのではないか？日常生活において心がときめくことは、よく、とまではいかずとも、それなりにある（はず）。ただ、それを記憶に埋もれさせしまっているのだとしたらー。

私はカレンダーを見上げ、今までのときめきの記憶をたどった。しかし限界というものがある。なかばカンニングのような謎の罪悪感をもちながら、スマホのアルバムを見た。多くは大好きな犬の写真。祖母とつくったたくさんさんの料理やスイーツに、感動した本の表紙。早朝ランニングしたときの朝日。忘れかけていた「感動」たちがそこにはあった。そしてもう一つ、まさかの展開。私のなんと多趣味なこと！数分前には趣味がないだのと大騒ぎしていたのに何たる矛盾か。わたし的には、どれもかじりかけで、これを極めているとは言えないのだ。お菓子作りにしても、読書にしても、いわゆる暇つぶし程度というのかける熱量が小さいから、まだ趣味とは呼びたくない。私の「これが趣味と呼べるか否か」の独自基準は大変厳しいのである。一言で言ってしまうえば意地っ張りだ。

今気づいた。実は私の趣味候補はいくつも存在していたんだ、そのひとつひとつを大事にしていなかっただけで。さつき思い出した過去の感動だって、写真がなければ記憶からこぼれ落ちていたところだった。本当にもったいない。私は、感動した景色や食べ物などは、「覚えておきたくて」あるいは「忘れないために」すぐに写真におさめなくなる。しかし実際には逆で、むしろ一度写真を撮るという行為をするだけで永遠に記録が残るからこそ、自分で覚えておくことをしなくなったのではないか。写真では、美しいものも色あせずにとどめておける。でも、その時の私の気持ちまではどうしたって写せない。当たり前だが私の感情は私の心の中にしかないからだ。まず写真、じゃなくて、その瞬間に感じた感動をかみしめること。これが、私にはできていなかった。ここまでできてやっと気付くとは、猛省である。

私は、この長い長い趣味探しの旅に、結論を出した。日々の生活の中で出会う「自分だけのときめき」を一つずつ大切に保管して積み重ねていったとき初めて、自分だけの好きなことに気付けるのだろう。今からでも遅くない。今日より未来、出会うすべてのときめきを抱きしめて、心の中を幸せでいっぱいにしよう！そうしたらきっと、いつかは趣味に出会えるはず。

これからも幾度も、趣味を聞かれる場面に遭遇すると思う。しかしもう、まさか「勉強です」なんて言わない。「いろんなことを体験しながら、好きなことを探している途中です」とこう答えるのだ。胸を張って「私の趣味」といえるものに巡り合えるその日への希望をもって。

高校生部門

最優秀賞

東京都 渋谷教育学園渋谷高等学校 一年

## 伝える相手は

近藤 千紗

クラーク先生は、ハイヒールを脱いで黒板の前に並べると、私達の方に向いた。歴史の授業開始のお決まりの合図だ。

父の転勤で私は英国の中学に通った。学校生活は大変でも、先生が素足で歩きながら熱く語る歴史の授業は独特で、興味深かった。

例えば、宿題では「ブラッディー・メアリーの悪名を持つメアリー一世をブラッディーだと思うか」や「オリバー・クロムウェルをどう評価するか」というエッセイが出た。歴史資料の多くはその時代のバイアスがある。それを読み解いて考えるように促された。

また、第二次世界大戦では、最初に三ヶ月かけてドイツの状況を学んだ。第一次世界大戦後のドイツ経済、ナチ党が政権を掌握する過程、八九%の支持率を得たヒトラーの政策を学び、ホロコーストに入った。浅薄な知識でドイツの批判をしないよう、ドイツ側の事情も丁寧に追うカリキュラムであった。

十年生になり、授業は真珠湾攻撃へと進んだ。クラーク先生なら、猪口邦子氏が受けた

『パールハーバーの授業』のような斬新な話をするだろうと、私は内心期待していた。

先生はまず、ドリス・ミラー海軍兵のドキュメンタリー番組を見せた。ミラー海軍兵は真珠湾攻撃の日、戦艦ウエスト・バージニアで炊事兵として勤務していたが、爆撃で負傷した兵士に代わり、一度も触ったことがないマシンガンを操作して日本軍に反撃した。その勇敢さにより、アフリカ系アメリカ人として初めて海軍十字章を受章した。番組が終わると、先生は私達に向き直り、こう尋ねた。

「みなさん、原子爆弾は絶対に落とすべきであったに、絶対に落とすべきではなかったに十をつけるとしたら、何をつけますか」

いきなり「原子爆弾」に話題が移った。びっくりする私をよそに、周りの子達はゆっくりと「四」や「五」をつけていく。その理由を問われると「やりすぎではあったかもしれないけれども、日本軍を止めるには仕方がなかった」「原爆は真珠湾攻撃への報復の意味もあつたのではないか」と声が上がった。彼女達の言葉は、以前テレビで見た、原爆に対する米国人の認識と似ていた。先生は最後に日本人である私を指した。私は「十」をつけて、原爆の投下前に日本の主要都市は空襲で壊滅的であつたこと、二発の原爆で二十万の一般市民が犠牲になつたことを説明した。

その日の帰り道、私は原爆についてもっと語るべきだつたかと自問自答した。しかし、

原爆資料館に行ったことのない私が説明したところで、どれほど説得力があっただろう。また、ロンドン帝国戦争博物館で、原爆の展示内容に驚いたことを思い出した。第二次世界大戦のフロアに展示されていたのは「リトル・ボーイ」のレプリカただ一つであった。

それとは対照的に、ホロコーストについては特別フロアが設けられ、その膨大な展示品数と衝撃的な内容に圧倒された。犠牲者の靴で満杯のアクリルケース、ポロポロの青い縞模様の収容服、毒ガスを吸う前の子どもの達の映像など、一つ一つを両親と見てまわった。

この特設フロアは、他のフロアと併せて、四十七億円をかけ、より詳細なものへと改修予定だ。世界各国から閲覧できるよう展示のデジタル化も進んでいる。さらに、欧州の主要都市のほとんどに、ホロコーストの展示施設がある。原爆もホロコーストも二十世紀最大の人類の過ちであるのに、この力を入れようの違いはいったい何だろうと思った。

日本に帰国して、『黒い雨』を読み終えて思うのは、原爆の犠牲者の無念さや後遺症で苦しむ人の辛さが、海外ではほとんど伝えられていないことだ。英国でも幼少時にいた米国でも、日常でそれを知る機会は無かった。偏りのない視点を大切にするクラーク先生がそれを知っていたならば、あの授業は違うものになっただろう。こうして、海外では原爆の惨禍を知らない世代が次々と大人になる。

だから、原爆の記録を伝える相手は世界であり、それをデジタル化して、互いに共有し

ていける方向へ、より一層力を注ぐべきだ。

この夏公開の、親族の被爆体験を綴った映画『八時十五分ヒロシマ父から娘へ』の原作者・美甘章子氏も、映画製作で目指したものとして次のように記している。

「日本人が日本人だけに語る、日本人についての映画ではなく、国籍や信条を超えて万人に訴えるための映画にして、世界へ出していきたい」

被爆者の高齢化が進むなか、広島平和記念資料館は一昨年に改修された。八月六日の惨状が多くの実物の資料を用いて表現され、外国人被爆者の声も紹介されているという。私はこの十月に学校の学習旅行でこの平和記念資料館に行く。展示された物と静かに向き合い、自分が見聞きしたことを英語で海外の人へ伝えられるよう、心に焼き付けたい。

高校生部門

優秀賞

兵庫県 姫路市立琴丘高等学校 一年

## 車窓の景色

永田 来幸

毎朝五時に鳴るめざましで起床し、のんびりな母の運転する車で駅まで十五分。六時四十八分発の閑散とした上りの電車に乗り込み、学校まで一時間二十五分。始めはくすんだ緑の田んぼと白っぽい空の二色で構成されていた車窓からの景色が、スケールの大きな、色とりどりの建物たちで埋め尽くされてゆく。

四月から電車通学を始めた私は、この車窓からの景色を見て初めて「上り、下り」とは一体何なのかを理解した。家から学校へ行くのは「上り」、田舎から都会へ。各駅で停車するたびに、じわじわと車内の密度が上がってゆく。登下校で人とすれ違うことすら珍しかった中学の頃とはまるで違う毎日に、私は心躍らせていた。

「そろそろ進路決めないと。」体育祭が終わり教室内がそんな雰囲気になり始めた中三の秋口、私はもう受験する高校を決めていた。英語を勉強したいから、やりたい部活があるから、担任の先生にはそう伝えたが、正直田舎に飽き飽きしていたのも大きな理由の一つだった。町に一つしかない馴染みの高校に通うとなれば、同じ通学路、同じクラスメイ

ト、同じ先輩後輩となるのは明らかだったし、私は田舎のそういった特性に窮屈さを感じていた。東京に住む親戚たちは帰省のたびに口を揃えて「やつぱり田舎はいいな。」と言うが、私は「わざわざお世辞を言う必要も無いのにな。」なんて思っていた。「田舎が良い。」と言う彼らの神経を、若干ではあるが疑っていたのだ。それよりも私は、好奇心くすぐる東京の土産話を聞ける事の方を期待していた。

高校に入ってから私の田舎への苦手意識は薄れる事無く、むしろ都会の便利さに感動し「そりゃあ皆都会に出る訳だ。」と納得していた。だが、夏休みのある経験をきっかけにしてその意識は変わり始めた。

午前だけの部活が終わり、その日は初めて家の最寄り駅まで帰る事になった。(普段は時短のために途中から車で帰っている。)乗り換えが必要だったので私はホームのベンチで電車を待っていた。発車は一時間後で、しかもそこそこに暑かったので「今からでもバスで帰ろうかな。」と考え始めていた。そんな時に、一本の放送がホームに流れた。「大変暑いので、一番ホームに停車中の車内で電車の到着をお待ち下さい。」こんな事があるのかと驚いたが、それと同時に、私は「乗ろうか、どうしようか。」と迷っていた。すると駅員さんが「涼しいですよ。」と言って車両の扉を開けてくれた。私はまたまた驚きお礼を言い、クーラーの効いた車内で待つことにした。その後も駅員さんは暑い中電車を

待つ人のために、ホームで水をまいていた。

四月から夏休みまでの間に、私は今まで知らなかった都会の性質を少しづつ体感していた。確かに私が嫌がっていたあの窮屈さは無いものの、今度は何か突き離されたような、居心地の悪い冷たさを感じるのだ。入学当初はあんなに心躍らせていた電車での通学も、この頃には「いかにストレス無く乗れるか」という修行のようになっていた、こんな状況だったので、あの駅員さんの数々の暖かい気遣いが私には余計に嬉しく感じた。

その後到着した電車の中で、私は「これって田舎限定だろうな。」と思った。都会ではみんな急いでいるし、気遣いや小さなおせっかいなどは生まれにくいだろう。東京の親戚たちが言う「田舎の良さ」を私も少しだけ理解し、共感できた気がした。

一両だけの小さな車体を揺らし、電車が山沿いを走ってゆく。いつもの田舎の風景が、何だか特別に思えた。全開にした窓から吹き込むさわやかな空気と白っぽい昼下りの陽の光はまるで、森林浴をしているようだった。窓の外の大自然を「上り」の先にいる人達が見たら、きつとびっくりして思わず笑ってしまうだろうな、そう思った。

いつもと同じ六時四十八分の電車、その車窓から「田舎の景色」が見えるのはせいぜい十分程だ。それが過ぎると、少しづつ、大きな建物が顔を出し始める。高校を卒業するまでの三年間、あと何回ここを通るかはわからない。この「車窓からの景色」を忘れないよ

うに、  
ずっと、  
大切にしたいと思う。

高校生部門

佳作

兵庫県立姫路西高等学校 二年

## 心の向日葵

齋藤 杏里紗

梅雨が明け、朝早くからジリジリと太陽の光が降り注ぐ、この季節がやってきた。「今日も各地猛暑日となるでしょう。」そんな言葉にうんざりしながらため息をつく毎日。午後からある部活動のことを考えると、憂鬱で仕方ない。真夏の体育館はサウナも同然だ。正直家を出るのさえ、嫌な日だつてある。しかし、そんな私を毎日励ましてくれるものがある。有名歌手の応援ソングや、偉人の名言なんていう、ありきたりなものではない。家の前の道端の花壇に咲く向日葵だ。玄関のドアを開けると、まっさきに視界に飛び込んでくる。誰が植えたのかも、いつ芽を出したのかも分からない。そんな比較的小さなこの向日葵に私は心を動かされる。

私がこの向日葵に気がついたのは、7月半ばのある朝。いつものように自転車をこぎ出そうとしたら、向日葵が小さく咲いているのが見えた。花を咲かすまでに、茎が伸びたり、葉が大きくなったりしてははずなのに、全く気が付かなかった。青空に向かって、ひとりでに咲く一輪の向日葵。なんだか元気が出た。たとえ仲間がいなくても、体が小さくても、太陽のもとで力強く生きているその向日葵の生命力がかっこ良く見えた。努力してい

でも、花開くまで気づいてもらえないかもしれないけれど、こうして生きていくんだと教えられているような気がして、私も強く生きていかなければいけない、そう感じた。そして、一輪の小さな向日葵に元気をもらおう毎日が続いた。

しかし、真夏の炎天下の中、なぜあの向日葵は立派に咲き続けていられるのだろうか。目にしたことはないが、ご近所さんの誰かが、お水をやってくれているに違いない。ここ最近雨は全く降っていないのだ。まさに、人間関係と同じだと私は感じた。皆誰かに励まされ、支えられて生きている。その誰かを支えている人だって、自分一人では生きていけずに、また誰かに支えられている。そんな生きるサイクルと言うか、まるで樹形図のような広がりがあると思う。この向日葵は、私の元気の源となってくれた。日々を生きていく源となってくれた。その向日葵にも生きていく源となる水を与えてくれる存在がいる。そのような大切なことを私達は忘れがちだと思う。目の前のことばかりを見て、孤独だとか、辛いだけの人生だなんてことを感じる。周りの人より恵まれない自分に落胆することもある。しかし、自分を支えてくれている人が必ずいることを忘れてはいけないと思う。それは、家族、友人、恋人など身近にいる人かもしれないが、自分の気づかないところにいる誰かかもしれない。人ではない、植物や風景、趣味の時間かもしれない。私のはあの向日葵に支えられたが、間接的に、話したこともないご近所さんにも支えられてい

たのだ。多くの人に支えられて生きているのだと改めて感じる事ができた。それと同時にあの向日葵のように、誰かを自然と支えられるような存在になりたいと強く思った。

この夏の、あの一輪の向日葵との出会いは、私に当たり前のようでも大切なことを教えてくれた。私は、私の心の向日葵となってくれている人を大切に、懸命に生きていくことを誓った。誰かの心の向日葵となれていることを信じて。

一般部門

最優秀賞

福岡県 朝倉市

## さよなら、我が家

感王寺 美智子（自営業）

タクシーを降り、坂道の上にある、実家を見上げる。古いブロック塀を撫でながら、一歩ずつ、踏みしめ上る。

突然の別れとは、人に限らず。この実家は、今秋、人手に渡る。何にでも、いつか、別れはやって来る。しかし、ここだけは、そんな日は、来るわけがないと思っていた。

六年前、父が亡くなり、母が、ひとりで暮らしをしていたが、もう高齢なこともあり、兄が自分の家に同居させようと、売りに出した。しかし、買い手などつくわけがない、そう思っていた。築百年の古い家。窓は隙間だらけ、廊下は斜めり、雨漏りもする。おまけに、駅から徒歩二十分のアクセスの悪さ。この辺には、売るに売れず、廃墟になっている空家が、いくつもあるのだ。

「この家が潰れるか、私が逝くか、どっちが先かね」

ここを離れたくない母も、のんびり構えていた。

だから、私も母も、買い手が見つかったという、兄の知らせに、耳を疑った。しかも、

家具も荷物も、そのまま置いて行っていいという。この広い古屋敷にある家具や荷物は、兄の家には、入りっこない。蔵の中にも、何やら沢山あるが、価値も解らないし、興味もない。処分に困るだけなので、ありがたい話なのだ。しかし、母の気持ちを思うと切ない。できることなら、もう少し、いさせてあげたい。だが、体調が優れないことも多くなり、物忘れも多くなった。これもタイミングかもしれない。この家を引き取ってくれる人など、この先、二度と現れないかもしれないのだ。

「ただいま」

門にたどり着くと、大きな信楽焼の狸が、横目で私を出迎える。藪のような庭。その奥に、草木に埋もれる古い家がある。私が生まれ、育ち、巣立った家だ。生い茂った庭の所々には、名も知らぬ小さな花が、咲いている。踏まないように、注意して歩く。

「ただいま」

庭石の影に棲む、野仏にも、挨拶をする。トカゲがシュルシュルと走り回る。知らない人が見たら、荒れ果てた庭だろう。しかし、これが、山野草を、こよなく愛した、父の庭だ。だが、いつも座っていた縁側に、咲いていたカタクリの花は、父と共に、消えてしまった。草をかき分けるようにして、たどり着いた玄関。表札は、父の名のままだ。

最後の「ただいま」を言おうと、戸に手をかける。ガタガタツ、歪んでいて開かない。「あら、お帰り」

物音を聞き、出てきた母が、内側から、難なくスツと開ける。

「結局、直さなかったわね、この戸」

「だって、フツーに開くじゃない」

最後の「ただいま」は、言いそびれてしまった。

「お兄ちゃんがね、持っていくのは、身の回りのものだけにしてくれって。ねえ、これ、いらない？」

「いらない」

母は、家の中を、ウロウロし、あちこちの引き出しを開けては、私にふる。

「ほら、これ、いい物なのよ」

「ごめん、いらない」

母にとっては、皆、離れがたい大切な思い出だ。動き回る母の背中を見ると、切なくなってくる。できるなら、もらってあげたい。しかし私も、狭い賃貸住宅暮らし。子供もいない。荷物は増やせない。

突然、母の背中が止まった。

「やめた。もう、いい。全部、置いていく」

お茶を入れ、ふたり、縁側に座る。庭土だらけの父のサンダルが、そのままだ。

「あ……」

その横に、消えたと思っていた、カタクリの葉があるのを見つけた。

「お母さん、これ、もらっていく！」

傷つけないように、植木鉢に、植え替えた。ナイーブな山野草だ。枯らしてしまうかもしれない。それでも、これだけは、持っていきたかった。

「母さん、大丈夫よ。思い出は、ずっと消えないから」

ありきたりの慰めしか言えない私に、母は、フツと微笑んだ。

「それがね、消えていくのよ」

さよなら、我が家。人も家も、どんなに愛しても、どんなに沢山の思い出を詰め込んで、別れる時は、あつけない。私と母は、何も持つてはいけなけれど、父が愛したこの庭の、軽やかな綿毛となり、飛んでいく。そしてその先で、また思い出の花を育てる。

そう、忘れたら、また、育てればいいんだ。ね、お父さん。

一般部門

優秀賞

大阪府 羽曳野市

ご褒美

松田 良弘（会社員）

幼い頃、近所に住んでいる祖母の家にお使いに行くと、祖母はご褒美として私の乗っている自転車に、シールを貼ってくれた。それはお菓子のおまけに付いていたキャラクターのシールで、子供達の間で大流行していた。シールまみれになっていく自転車と祖母の笑顔が楽しみで、私はいつも全力でペダルを漕いでいた。

高校生になった私は、友達の影響を受けてバイクの免許を取った。初めは通学の時だけ乗っていたが、運転するのが楽しくなると、下校の時や休みの日に仲間と街を走るようになった。やがて学校も休みがちになり、毎日友達とつるんではバイクを乗り回していた。

しかし、ある日違反運転で警察に補導された私は、学校を停学になってしまった。親にバイクも処分された私は、毎日自宅の部屋に閉じこもり、何もせず誰とも話さずに、一日を無気力に過ごしていた。

停学になって三週間程が過ぎたある時、窓の外から私を呼ぶ声がした。聞き覚えのある声だ。私はカーテンの隙間から外を見た。そこには、杖をついて私の部屋を見上げている祖母の姿があった。私は窓を開けた。

「病院の帰りにちよつと寄ってみたのよ。元気にしている？」

祖母はハンカチで額の汗を拭きながら、私に向かって笑いかけた。私は驚いた。祖母にとつては「ちよつと」の距離ではないはずだ。数年前、祖母は脳梗塞を患い、その後遺症で左半身に麻痺が残っていた。そんな祖母にも最近会ってはいなかった。

「あなたの顔が見たくなつたのよ」

祖母は治療の経過や、リハビリセンターに通っていることを教えてくれた。

「あなた、自転車には乗っているの？」

祖母はガレージに目を向けた。そこには高校の入学祝いとして祖母が買ってくれた自転車が置いてあった。通学用にと長距離も走れるスポーツタイプの自転車だ。しかし、今は埃を被っている。

「ごめん。全然乗っていないんだ」

私は久しぶりに声を出した。

「あら喋れるじゃないの。元氣そうね」

祖母はいたずらっぽく言ったが、私は何も言い返せなかった。

「リハビリがてら明日も来るから、またお話ししましょう！」

祖母は手を振る代わりに、杖を軽く持ち上げた。そして、ゆっくりと帰って行った。

次の日から毎日、祖母は私に会いに来た。祖母は窓越しにテレビの話題や誰かの噂話、好きな食べ物の話など、他愛のない話題を面白おかしく話してくれた。私はそれを黙って聞いていたが、祖母はそんな私を責める訳でもなく、何かを求める訳でもなく、いつも楽しそうに笑っていた。私は毎日聞く祖母のバカ話のおかげで、心のコリが少しずつ和らいでいくのを感じていた。

それから一週間後、祖母が病院に運ばれたと親戚から連絡があった。家の中で転んで頭を打ったとのことだった。私は部屋を飛び出した。そして、ガレージに駆け込んだ。そこには祖母が買ってくれた自転車が、鼻息を荒くして待っていた。

久しぶりの自転車にふらつきながら、私はどうにか祖母がいる病院に辿り着いた。幸い

祖母の容態は安定していた。

「あら珍しい。あなたの方から来てくれるなんて」

祖母は私をちゃかした。

「ばあちゃんが買ってくれた自転車に乗って来たんだ。そうだ、これお見舞い」

私はベッドに立てかけてある祖母の杖に、シールを貼った。

「ばあちゃんが集めているシールだよ」

祖母は食パンの袋に付いているシールを集めていると話していた。たくさん集めてそれを何かに貼ってある写真を送ると、記念のグッズが貰えるのだった。私は病院に来る前に、この食パンを買いにスーパーに寄っていたのだ。

「俺も一緒に集めるから、また貼ってあげるよ。だからリハビリ頑張って！」

私は祖母に杖を渡した。

「今度は私をご褒美を貰う番ね。でも、シールでいっぱいになる前に、杖を卒業出来るように頑張るわ。その時は二人でサイクリングに出かけましょう！シールの続きは、私の自転車に貼ってね」

食パンで作ったサンドイッチも持って行こうと、祖母は杖をハンドル代わりにして、ペダルを漕ぐまねをした。

一般部門

佳作

長野県 南佐久郡

## 二度目の初心

常世 ゆかり（自由業）

心理セラピストをしている私の相談室兼自宅は、八ヶ岳の山すそにある。車や列車で訪れる相談者は、幼少期に負った心の傷がもとで自己肯定感を持てずいたり、何かが原因で生きる気力を失いかけていたりする。

そういう方が必要なセラピーを終えると、セラピー前と大分様子が違ってくる。不安げで硬かった表情は柔らかくなり、帰り際には言葉数も増えている。庭へ出て、茂る木立から野鳥のさえずりが響いてくると、「きれいな声ですね」と微笑して樹々を見上げることもある。そんな時、私は、相談者の内部に生じた明るい余裕に気づいて胸を撫でおろし、相談者を見送ったあともしばらく庭に佇んで、野鳥の清らかな声に浸っていたくなるのだ。

ところが、庭にいと、シジュウカラから警戒される事態が起きた。野鳥の子育てが見られるかも、と軽い気持ちで夫が軒下に設置した巣箱に、すぐにシジュウカラが営巣し、卵七つを産んだのだ。七月に入って次々に卵が孵ると、庭を少しうろつくだけで、親鳥の警戒の声がかまびすしい。いったいどこで見張っているのかと思うが、超小型カメラで巢

箱を毎日覗き見しているのが後ろめたく、その声に追い立てられるように家の中に引つ込むしかなかった。

生まれたての雛の体は、半透明のピンク色で、口だけが黄色い。親鳥の敷きつめた苔と獣毛の産座でしばらくはぐったりしているが、もう翌日から親鳥の運んでくる芋虫等を丸のみする。産座のくぼみでおとなしく待ち、親鳥の帰巢を察知するやいなや、目もあいていないのに、黄色い口をパカッと一斉に開く。

私には、その黄色い口が、薄暗い巣箱に灯ったあたたかな灯火のように思えた。一日に何度も力強く灯る七つの灯火を見ていたら、「生きるために生まれてきた」という強い意志のようなものが伝わってきた。

雛は日増しに大きくなり、目があくころには、灰色の羽毛が体全体を包み始めている。餌をねだる声は賑やかというよりすさまじくなった。その鳴き声も、親鳥に向かって必死に見開く黒々とした丸い目も、生きるために生まれてきた、と声高に叫んでいた。

「生きるために生まれてきた」ふと声に出してみると、なぜか胸に引っかかるものがあり、次の瞬間、凍りつく思いがした。「人は死ぬために生まれてくる」と、そう信じている自分を発見したからだ。セラピストの私は、相談者には生きる希望を持ってほしいと願っている。しかし、素の私は、生よりも死というものに重きを置いていたのである。

小学校二年生の時の出来事が頭に浮かんだ。昨日まで隣で笑い声を立てていた同級生の女子が、山の斜面で遊んでいるうちに生き埋めになった。斎場で生まれて初めて焼香をしながら、昨日生きていても今日は死ぬのだという暗い衝撃に襲われ、人は死ぬために生まれてくるのだと悟った。その印象は、石のように冷たく固まって胸底に沈んでいった。

父の晩年の様子も想起された。教員だった父は、脳出血と誤嚥性肺炎を患い、人工呼吸器につながれたまま八十五歳で死んだ。目はあいていても意思表示は一切できず、あとは死を待つのみ、という姿を見るのは辛かった。私は、胸の石を心できつく握りしめて、人は死ぬために生まれてくるのだから、と繰り返し自分に言い聞かせていたのである。

一方、巣箱の中では、七羽の雛が、生きるために生まれてきた、と純粹に訴え続けている。それを毎日見ているうちに、私の中で何かが変わった。胸底の石をどけられた感じがして、妙にすがすがしくなっていたのだ。

五十七年前にこの世に生まれた私も、生きるために生まれてきたと言って産声をあげたのではなかったか。生きるために母親にお乳をねだったのではないか。初心忘るべからず、というが、こんなに重要で単純な初心をどうして忘れ去ってしまったのだろう、と思った。孵化から十八日目の朝、雛たちは巣立ちを迎えた。虫をくわえた親鳥がやってきて、しきりと雛たちを外へ誘う。雛たちは、巣穴から身を乗り出して一瞬ためらったあと、一羽、

また一羽と飛び立った。それまでいた暗く狭い空間を蹴って、夏の景色がひらける広大無辺な新世界へ散っていった。

私は外へ出た。あたりを見回して雛たちの姿を探した。見つけれなかったが、ふしぎなことに、はじめての森に降り立った感じがして思わず立ちすくんだ。高い空から降り注ぐ金の陽光。澄み切った風。白樺の肌は白金に輝き、土に転がる石ころすらみずみずしい。生まれたての赤ん坊のきれいな目には、きつとこんなふうに映るのではないか、と感じた。赤ん坊だったころの気持ちはどうがんばっても思い出せそうにない。だが、晴れがましいような、まぶしいような気分で、これから生きてゆく世界を眺めたことだろう。半世紀ぶりに蘇った初心と感覚であった。

# 令和3年度 第7回 藤原正彦エッセイコンクール

## 概 要

### ■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

### プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。  
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。  
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。  
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。  
そのほか、『国家の品格』『国家と教養』『本屋を守れ』など著書多数。  
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『我が人生の応援歌（エール）』。

### ■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。  
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和3年9月15日締め切り。

### ■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに「最優秀賞」×「優秀賞」×「佳作」各1編。  
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

### ■ 応募状況 … 応募総数 1,848点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	168点	143	20	163	5	0
高校生部門	909点	671	225	896	13	0
一般部門	771点	48	104	152	617	2
合計	1,848点	862	349	1,211	635	2

中学生部門：市外では、神戸市、西宮市、芦屋市、宝塚市、加東市、太子町、宮城県、福島県、東京都、石川県、大阪府から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は10校であった。  
個人応募者は9人であった。

高校生部門：県外では、宮城県、千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、大阪府、奈良県、和歌山県、佐賀県、鹿児島県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は10校であった。  
個人応募者は20人であった。

一般部門：10代から90代まで各世代から応募があり、そのうち60代以上が過半数を占めた。

北海道から沖縄県まで、すべての県から複数の応募があった。  
海外からの応募者2人は、アメリカ在住者（いずれも日本人）である。

### ■ 表彰式

日時：令和4年1月22日（土）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）



第7回 藤原正彦エッセイコンクール  
入賞作品集

---

編集・発行 姫路文学館  
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地  
TEL (079) 293-8228

---

令和4年(2022年)1月22日発行